平成２５年度

第３１回　関東ブロック中学校社会科教育研究大会
第３６回　神奈川県公立中学校教育研究会社会科研究大会

横浜大会紀要

横浜市立中学校教育研究会社会部会

2013 YOKOHAMA

平成２５年度

第３１回　関東ブロック中学校社会科教育研究大会
第３６回　神奈川県公立中学校教育研究会社会科研究大会

横浜大会

大 会 主 題

生徒に思考させるための教師の役割

－思わず考えたくなる授業をめざして－

期　　日　　平成２５年１１月１５日（金）

主　　催　　関東ブロック中学校社会科教育研究会
神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会
横浜市立中学校教育研究会社会部会

共　　催　　横浜市教育委員会

後　　援　　神奈川県教育委員会
全国中学校社会科教育研究会
神奈川県公立中学校長会
横浜市立中学校長会

目　　次

◆あいさつ
関東ブロック中学校社会科教育研究会会長　石上　和宏・・・・・・３
神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会会長　小林　秀喜・・・・・・４
横浜市教育委員会教育長　岡田　優子・・・・・・５
横浜大会実行委員会委員長　榎　登志裕・・・・・・６

◆横浜大会開催要項　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７

◆研究提案
基調提案　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
「生徒に思考させるための教師の役割～思わず考えたくなる授業を目指して～」
地理実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
歴史実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４２
公民実践事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０

◆記念講演　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９
演題「意欲的に教材開発する社会科教師を育てる」
講師　髙橋　和男　氏
神奈川大学人間科学部講師　青山学院大学教職課程　非常勤講師
元横浜市教育委員会小中学校教育課長

◆第３２回関東ブロック中学校社会科教育研究大会群馬大会要項　・・・・・・６１

◆大会関係資料
関東ブロック中学校社会科教育研究大会開催のあゆみ　・・・・・・・・・・６３
関東ブロック中学校社会科教育研究会役員名簿　・・・・・・・・・・・・・６４
関東ブロック中学校社会科教育研究会会則　・・・・・・・・・・・・・・・６５
関東ブロック中学校社会科教育研究会　部および事務局に関する細則　・・６７
関東ブロック中学校社会科教育研究大会横浜大会規約・・・・・・・・・・６８
神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会地区部会長・地区幹事名簿　・・７０
横浜市教育研究会社会部会役員等・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７１

◆あとがき

（会場案内図）

横浜大会の開催にあたって

関東ブロック中学校社会科教育研究会
会長　**石上和宏**

第31回関東ブロック中学校社会科教育研究会を横浜市で開催する運びとなりました。平成17年に第23回関東ブロック中学校社会科教育研究会が第38回全国中学校社会科教育研究会と同時開催となってから8年ぶりの大会です。前大会は「意欲的な学びの追究」という主題のもと、副題に「材、方法、評価を視点として」をかかげ、地理、歴史、公民という三分野にとらわれず、新たな提案をしていただきました。当時、私はその発表をお聞きして、その斬新な提案に大いに刺激を受けたものです。横浜市の発表は常に新しい視点からの発表が多いのが特色です。今回も「生徒に考えさせるための教師の役割」を主題にかかげ、新規採用教員の大量採用が関東一円の都県市において行われつつある現状を鑑み、若手教員の人材育成、そして学校文化の伝承はまさに喫緊の課題ともなっています。さらに、言語活動の充実が学習指導要領でも特筆され、各学校で取り組まれていることと拝察しますが、社会科としてどのように充実を図っていくか、この学習の充実のねらいが「思考力・判断力・表現力」の育成であることを考えると、「生徒に考えさせるための教師の役割」は魅力ある主題であるとともに、今日的な課題でもあり、時宜にかなった主題であるといえます。

今年度は学習指導要領の全面実施の２年目にあたり、実践段階での課題も見えてきました。社会科全体の改訂のポイントである基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得、言語活動の充実、社会参画、伝統文化、宗教。これら全体に関わる課題については、次第に成果が出てきていると思います。しかし、各分野の改訂については十分に対応できているといえるでしょうか。

世界の諸地域学習は州の概要とテーマとをどのように配分するのか。

動態地誌的な扱いの国土学習は静態地誌とは、どのように違うのか。

歴史的分野で、考察したり、説明したりする学習をどれだけ取り入れているか。

歴史的分野で身近な地域の伝統や文化をどのように扱うのか。

独立した「現代」をどのように扱うのか。

「対立と合意」はさることながら、「効率と公正」をどのように取り上げているか。

「よりよい社会を求めて」ではどのような学習をさせているか。

今大会は、学習指導要領を全面的に始めてみて、分かったこと、気づいたこと、明らかになった課題等も出し合い、解決に向けて皆で叡智を出し合う場となることを期待しています。社会科は私たちの身の回りで起こる社会事象をきちんとした見方、考え方でとらえ、その課題を皆で考え、提案し合い、解決に向けて力を合わせる人間的な教科です。実り多き大会となることを願っています。

終わりに、全国からも注目される大会主題をかかげ、研究を推進されました横浜市立中学校教育研究会社会部会の皆様に感謝申し上げます。また、本大会開催のためにご指導・ご支援・ご協力を賜りました神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会をはじめとする、関係機関の関係者の皆様に心からお礼申し上げ、あいさつといたします。

あ　い　さ　つ

神奈川県公立中学校教育研究会
社会科部会　会長　**小林　秀喜**

第３１回関東ブロック中学校社会科教育研究大会・第３６回神奈川県公立中学校教育研究会社会科研究大会が、横浜市において開催されますことは、社会科教育のより一層の発展を願う私たちにとっても大きな喜びでございます。

さて、平成２４年度より完全実施されました学習指導要領は、今年度２年目を迎えております。この学習指導要領において、社会科では「基礎的・基本的な知識・概念や技能の習得の重視」「言語活動の充実とともに思考力・判断力・表現力の育成」「社会参画、様々な伝統や文化、宗教に関する学習などの重視」が求められています。そして、社会的事象に関心を持って多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることが一層重視されています。

そうした中での、本研究大会の研究主題は、『生徒に思考させるための教師の役割』―思わず考えたくなる授業をめざして―であります。この主題は、生徒の思考力をどのようにして育成していくかについての教師の役割に焦点をあて、これまでの研究実践をもとにすべての教師がすぐに授業に導入していける内容を取り扱っております。２１世紀を生きる子どもたちの「生きる力」として重要な思考力・判断力・表現力をどのように育成していくのかについての研究成果を大いに期待し、また今後の社会科教育における課題の解決に向けての一助になればと思っております。

また、昨今全国的に、経験の浅い若手教員の数が増加する傾向になってまいりました。そうした若手教員が社会科における目標や役割をしっかりと認識し、指導の内容や方法、適切な評価などについての力量をつけていくことが喫緊の課題としてとり上げられております。そうした意味においても、今回の研究大会の研究主題は教師の役割に焦点を当てたものであり、普段の授業にもそのまま導入できるような研究授業の内容であります。また、記念講演においても、教師を育てるという課題に焦点をあてた、演題は「意欲的に教材開発する社会科教師を育てる」～巡検をとおして社会的事象をとらえる力を養う～というものであり、特に若手教員の方々には大いに参考になるものだと思っております。是非、多くの方々にご来校いただき、今回の研究内容等につきましてご助言やご指導をいただければ今後の私たちにも大変参考になると思っております。

最後になりましたが、本研究大会の開催にあたりまして、ご尽力を賜りました横浜地区の中学校教育研究会並びに中学校校長会をはじめ教育委員会の皆様には心より感謝申し上げます。さらに、神奈川県教育委員会、神奈川県公立中学校教育研究会社会科に所属する先生方に多大なご支援とご協力をいただきましたことをこの場をお借りいたしまして厚くお礼申し上げます。また、会場校としてご協力いただきました横浜市立荏田南中学校・横浜市立荏田南小学校、そして両校のＰＴＡの方々にも深く感謝申し上げます。

あ　い　さ　つ

横浜市教育委員会教育長
岡　田　優　子

このたび、第31回関東ブロック中学校社会科教育研究大会、第36回神奈川県公立中学校教育研究会社会科研究大会が横浜市を会場として盛大に開催されますことを、心よりお祝い申し上げますとともに、各都県、県内他の市町村よりお集まりの皆様方を心から歓迎いたします。

昨年度より、中学校においても新学習指導要領が全面実施となりました。各学校においては、改訂の趣旨を踏まえ、創意工夫をこらした教育課程を編成するとともに、家庭や地域社会と連携しながら特色ある教育活動を展開されていることと思います。

横浜市では、社会状況の変化や改正教育基本法などを踏まえ、平成23年1月に教育施策推進の基礎となる「横浜市教育振興基本計画」を策定しました。具体的には、「横浜らしい教育の推進」「確かな学力の向上」「豊かな心の育成」など14の重点施策を盛り込み、３つの基本「知」「徳」「体」の調和がとれ、二つの横浜らしさ「公」「開」を身に付けた「横浜の子ども」をはぐくむさまざまな取組を実施しております。特に重要な取組として、義務教育９年間の連続した学びの実現を目指した横浜型小中一貫教育を推進しております。

今後は、教育内容や方法に関わるスタンダードとして作成した「横浜版学習指導要領」に基づき、各学校で編成したカリキュラムのもと、授業の質的な向上を通して子どもにとって、より「わかる授業、魅力ある授業」を行うことが求められています。

さて、学習指導要領社会科編では、改訂の趣旨として、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得に努めるとともに、思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむため言語活動の充実を図り、社会参画に関する学習を重視することが必要であるとされています。

本市では、横浜の子どもたちが「生きる力」を身に付けるために、学ぶ意欲を育て、自ら課題を克服しようとする力を伸ばすことに重点を置き、思考と「教師の役割」に特化して研究を深めて参りました。そこで、本大会では、主題を『「生徒に思考させるための教師の役割」－思わず考えさせたくなる授業をめざして－』と設定し、本市のこれまでの取組を発表、提案することといたしました。各都県、市町村で活躍されている先生方が一堂に会し、各提案について協議されることは、誠に意義深いものであります。皆様方から、本日の本市の提案に日頃の実践を踏まえた貴重なご意見をいただき、活発な議論が展開され、本大会の成果を各都県、市町村の社会科教育の充実と発展に役立てていただくことを期待しております。

最後になりますが、本大会を開催するにあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に深く敬意を表しますとともに、関東ブロック中学校社会科教育研究会、神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会のさらなる発展とご参会の皆様のますますのご健勝とご活躍を祈念いたしまして、祝辞とさせていただきます。

横浜大会の開催にあたって

横浜大会実行委員会
委員長　**榎　登志裕**
（横浜市立教育研究会社会部会会長）

第３１回関東ブロック中学校社会科教育研究大会横浜大会及び第３６回神奈川県公立中学校教育研究会社会科研究大会の開催にあたり、多くのご来賓のご臨席を賜り、かつ、関東各地から多数の皆様のご参加をいただき心より感謝申しあげます。

横浜市立中学校教育研究会社会部会（浜中社研）では、平成１７年の全国・関東ブロック社会科教育研究大会横浜大会の成果を検証・継続しながら、新たな研究テーマを設定し、現場での授業実践を大切にしながら、研究に取り組んでまいりました。

平成２２年度より大会実行委員会を組織し、大会主題を「生徒に思考させるための教師の役割―思わず考えたくなる授業をめざして―」とし、本格的に大会開催に向けての研究の推進を図りました。

研究推進にあたっては、研究仮説を『教師が単元(授業)を構成するとき、生徒の思考を「拡散させ→収束させ→統合させる」ように構造化すると、生徒が思わず考えたくなる授業になる』と設定しました。拡散(自由な発想)→収束(根拠ある考え)→統合(まとめ)を意識し、単元(授業)の中にそれぞれの思考場面を配置することで、生徒が思考するようになると考えました。まず「思考」について研究し、思考場面の整理をおこなう中で思考場面リストなどを作成し、「拡散」「収束」「統合」の整理をおこないながら、仮説実証のための研究授業を積み重ねています。

今研究大会の特徴の一つは、荏田南中学校の社会科教師３名が、自校の生徒を対象に授業実践・公開をおこなうことです。「研究のための研究」ではなく、実践に即したどの学校現場でも実践可能な授業方法等を提案しています。近年、急増している経験の浅い先生方にとっては、特に、有効で、かつ、大きな刺激となる大会であると思います。

横浜大会では、参加されたどの学校の先生方にも実践可能な「今までの研究会が積み重ねてきた実践成果をもとに」提案・発表を行いたいと考えています。

全体会での講演についても、横浜市立中学校教育研究会社会部会が４９年間にわたって実施している「夏季巡検」の成果をふまえた授業づくりに焦点をあてた内容になります。講演者は、元本研究会会長であり、永年にわたり巡検の中核を担っていただいた浜中社研の先輩です。即戦的な授業づくりに役立つものと自負しています。

結びになりますが、本研究大会を迎えるまでの間、記念講演を含めご指導いただきました神奈川大学、青山学院大学講師髙橋和男様をはじめ、各分科会場でご指導やご示唆をいただきました文部科学省、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会の助言者の皆様、ならびに、開催にあたりご支援いただいた神奈川県・横浜市立中学校長会、会場校である横浜市立荏田南中学校、横浜市立荏田南小学校の教職員の皆様および会場校ＰＴＡを始めとする全ての関係の皆様に心よりお礼申しあげます。

大 会 開 催 要 項

１．　大会主題　　「生徒に思考させるための教師の役割」

－思わず考えたくなる授業をめざして－

２．　期　　日　　平成２５年１１月１５日（金）

３．　会　　場　　全体会　都筑公会堂

横浜市都筑区茅ヶ崎中央 32-1　　電話 045(948)2400

横浜市営地下鉄ブルーライン・グリーンライン　センター南駅下車徒歩５分

分科会　横浜市立荏田南中学校

横浜市都筑区荏田南二丁目５番１号　　電話 045(942)0960

横浜市立荏田南小学校

横浜市都筑区荏田南二丁目５番２号　　電話 045(942)1040

横浜市営地下鉄グリーンライン　都筑ふれあいの丘駅下車徒歩１３分

４．　主　　催　　関東ブロック中学校社会科教育研究会

神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会

横浜市立中学校教育研究会社会部会

５．　共　　催　　横浜市教育委員会

６．　後　　援　　神奈川県教育委員会　　全国中学校社会科教育研究会

神奈川県公立中学校長会　　横浜市立中学校長会

７．　記念講演　　演題「 意欲的に教材開発する社会科教師を育てる 」

～巡検をとおして社会的事象をとらえる力を養う～

講師　髙橋　和男　氏

神奈川大学人間科学部教職課程非常勤講師　青山学院大学教職課程非常勤講師

元横浜市教育委員会小中学校教育課長

８．　日　　程

9:00	9:30	10:40	11:50	12:10	13:00	13:30	14:00	15:00	16:00	16:30終了
受付	全体会		昼食休憩・移動			分科会				
	開会行事 基調提案	記念講演		理事会	受付	分科会開会	公開授業	研究協議	指導講評	諸連絡

９．　**基調提案**　　横浜市立中学校教育研究会社会部会研究部長
主幹教諭　田中　良樹（横浜市立西金沢中学校）

１０．**授業公開**

【地理的分野】

〔会　場〕　横浜市立荏田南小学校　体育館
〔指導・助言〕　神奈川県教育委員会子ども教育支援課　指導主事　黒川　保之　氏
〔授　業〕　「食卓から何が見えるか」世界の諸地域「北アメリカ」（第１学年）
横浜市立荏田南中学校　教諭　近藤　悦子

【歴史的分野】

〔会　場〕　横浜市立荏田南中学校　格技場
〔指導・助言〕　文部科学省初等中等教育局　視学官　中尾　敏朗　氏
横浜市教育委員会北部学校教育事務所指導主事室
主任指導主事　濵本　貴康　氏
〔授　業〕　「なぜ江戸幕府はなぜ続いたのか」近世の日本（第２学年）
横浜市立荏田南中学校　教諭　堤　　拓

【公民的分野】

〔会　場〕　横浜市立荏田南中学校　体育館
〔指導・助言〕　横浜市教育委員会指導部指導主事室　首席指導主事 三嶽 昌幸 氏
〔授　業〕　「財布の中から経済を学ぼう」私たちと経済（第３学年）
横浜市立荏田南中が校　教諭　大谷　英輔

１１．**全体会次第**

Ⅰ　開会行事

(1) 開会のことば　横浜市立中学校教育研究会社会部会　副会長
(2) 主催者挨拶　関東ブロック中学校社会科教育研究会　会長
横浜市立中学校教育研究会社会部会　会長
(3) 来賓挨拶　横浜市教育委員会　教育長
全国中学校社会科教育研究会　会長
文部科学省
(4) 来賓紹介　大会実行委員会　事務局長
(5) 感謝状及び記念品の贈呈
(6) 次回大会開催地挨拶　群馬県小学校中学校教育研究会中学校社会科部会　会長
(7) 基調提案　横浜市立中学校教育研究会社会部会　研究部長
(8) 閉会のことば　神奈川県公立中学校教育研究会社会科部会　会長

＜休息＞

Ⅱ　記念講演

(1) 講師紹介　大会実行委員会　事務局長
(2) 記念講演　演題「 意欲的に教材開発する社会科教師を育てる 」
(3) 謝辞　横浜市立中学校教育研究会社会部会　副会長

基調提案

7月5日(金)
聞き逃すな!
ふり返り月まで
子どもたちへの幼年期教育
政治家に働きかける
元首に直接はたらきかける
外国人と友だちになる
自治体と話す
資料などの援助
マスコミで訴える
デモ・イベント
外国人と友だちになる
元首に直接はたらきかける
デモ・イベント
事務力の強化

おもに研究を担当した委員

【基調提案】

荏田南中学校	榎　登志裕
いずみ野中学校	玉城　重子
笹下中学校	法村　盛郎
日野南中学校	石川　博
西金沢中学校	田中　良樹
富岡東中学校	山本　俊輔
平戸中学校	古川　正人
老松中学校	柿崎　順子

１　研究主題

生徒に思考させるための教師の役割
～思わず考えたくなる授業をめざして～

２　主題設定の理由

（１）前研究大会の成果について

本研究は、８年前に横浜市で開催された平成１７年度第２３回関東ブロック中学校社会科研究大会（第３８回全国中学校社会科研究大会）の成果を引き継いだものである。

前研究大会では、『意欲的な学びの追究～材・方法・評価を視点として～』を主題にして、「生徒が生き生きとやる気を出して授業に参加するにはどうすればよいか」という視点で研究を行った。

生徒の意欲を引き出すために、授業技術の向上に取り組むだけでなく、心理学やコーチング、マーケティングなどの成果も参考にして、研究を進めていった。特に、企業が消費者のニーズに応えて、様々な戦略を練っていくマーケティング理論から、多くの示唆を得ることができたと思う。

研究の結果、生徒のおもいやねがいに応えていく姿勢に意欲を引き出す鍵があると考えた。そこで、授業に対する生徒の声に耳を傾けて、それをまとめていった。

その中から

①自分が知りたい、わかりたいことを取り上げてほしい。
②自分が生き生きと参加できる場面をつくってほしい。
③自分の力や成長のようすがわかるようにしてほしい。

という生徒のおもいやねがいが見えてきた。

①に応えるために・・・
生徒の関心のありかを探り、知りたい、わかりたい材を開発すること
②に応えるために・・・
発表や討論、創作など、生徒が生き生きと参加できる方法を取り入れること
③に応えるために・・・
生徒が自分自身で学習をふりかえり、成長を実感できる評価をすること

などが意欲的な学びにつながると考え、様々な実践を行った。

（２）前研究大会の課題について

このように前研究大会では、生徒のおもいやねがいに応えるということを軸にして研究をまとめ、多くの意欲的な生徒の姿が報告された。

その一方で、それだけで終わってよいのかという声も聞かれた。確かに生徒は活発なグループ学習を行ったり、きれいな歴史新聞をまとめたり、生き生きと授業に参加するようにはなった。しかし、活発なグループ学習でも話し合いの内容が深まらなかったり、きれいにまとまっている歴史新聞でも内容は資料の丸写しであったりと、学びが表面的で質が低い場合もあった。

学びの質を高めていくためには、教師の適切な支援や働きかけも大切ではないか、より深く事象を理解する上で、生徒自身の疑問や気づきは欠かせないのではないかと再認識した。

そこで、今回は学びの質を高めるために、生徒がもっと考える場面をつくること、教師が意図的な授業づくりをすること、生徒の思考を促すために教師が適切に支援や働きかけをすることを研究の軸とした。

①学びの質を高めるために・・・生徒が考える学習場面を設定する。
②効果的な授業づくりのために・・・考える場面を意図的に配置した授業づくりをする。
③教師の支援や働きかけをするために・・・教師の役割にスポットをあてる。

以上の趣旨から本研究主題を設定し、研究を進めることとした。

３　研究の経緯

（１）思考場面リストの作成

ひとことで「思考」と言っても、定義づけがなかなか難しい。先行の研究を検証したり、学者や心理学の見地も視野に入れ、様々な文献にあたったりしてみた。しかし、研究が専門的になりすぎて、実践的な授業づくりという観点から外れていく心配がでてきた。

そこで、日々の実践から「思考」がどのようなものかをとらえることにした。私たちが授業をしている中で、生徒が思考していると思われる場面をリストアップし、研究授業や実践提案などで検討を行った。

○地理的分野「世界の国々～ＥＵ諸国～」

ヨーロッパ諸国がなぜ統合しようとしているのか、その理由をワークシートにまとめる授業を行った。そして、生徒がどのような思考をするのかを探った。

生徒は授業のまとめで、歴史的分野で学んだ「ヨーロッパでは戦争が繰りかえされたこと」をもとにしてとられ、因果関係をもとにして仮説を立てていることがわかった。

○歴史的分野「日清・日露戦争」

ビゴーの風刺画はどのような歴史的事実を表しているかについて話し合うことを通して、生徒がどのように思考をするのかを探った。

生徒は、日清・日露戦争の風刺画に描かれていることをさまざまな事実から予想したり、話し合いの中で自分の意見をまとめたりしていることがわかった。

○公民的分野「正当防衛が成立するかどうか」

童話『三匹の子ぶた』をもとに、オオカミを殺してしまった子ぶたの模擬裁判を通して、生徒はどのように思考をするのかを探った。

その結果、ロールプレイをする中で、根拠をもって有罪か無罪かを選択し、弁論の可否をジャッジしたりしていることがわかった。

以上の他にも様々な実践を通して、検討してきたものが思考場面リストと言われる次の表である。

【思考場面リスト】

①予想・予測する（単元の初めでイメージを出し合うなど）
②想像する（絵日記など）
③ひらめく（ブレインストーミングなど）
④筋道を立てる（レポート作成など）
⑤立場をかえる（ディベートなど）
⑥関連づける（リンクマップなど）
⑦順位をつける（ダイヤモンドランキングなど）
⑧立場になる（ロールプレイなど）
⑨区分する（ＫＪ法など）
⑩意見を述べる・聞く（議論、話し合いなど）
⑪比較する（ディベートのジャッジなど）
⑫立案する（プランニングなど）
⑬選択する（ディベートのジャッジなど）
⑭評価する（相互評価など）
⑮規則性を見つける（単元のふりかえりなど）
⑯再構築する（ポートフォリオやノートを整理するなど）

（２）授業づくりへの転換

こうしてまとめた思考場面リストだが、これをどのようにして授業に生かすことができるのかがその後の課題となった。

このリストを整理すれば良いのではないかと、思考場面を同じ質のものにグルーピングしたり、思考の質で序列化したりしてみた。しかし、思考場面自体「立

場をかえる」と「ひらめく」とでは、同一の視点でくくることができないのではないかという疑問が出てきた。

そこで発想を切り替えて、リストから新たに思考をとらえようとするのではなく、問題解決学習などの先行研究や、話し合いや議論などの中で思考をスムーズに促していくファシリテーションのスキルを参考にすることとした。

問題解決学習では、子どもの考えが広がることを「拡散的思考」、考えがまとまることを「収束的思考」としている。また、ファシリテーションのスキルでは、話し合いを支援する際に、初めに自由に話し合い、様々な考えを引き出すことを「発散」、次に図解ツールなどを用いながら、議論をかみ合わせ、論点を絞り込んでいくことを「収束」、最後に合意形成をして成果を確認することを「活用」としている。

そこで、思考を捉える上でも、この理論は有効であると仮定し、「生徒の考えが広がる場面」、「生徒の考えがまとまる場面」、「生徒が考えたことをふりかえる場面」を設定してみた。

すると、思考場面リストがうまくあてはまり、有効に活用できるようになった。さらに、授業の構成と思考が深く関係していることも見えてきた。教師が生徒の思考を促すために、どのような働きかけをすれば質の高い授業になり、内容がより深まるのか、授業づくりについて仮説を立てて研究を深めることにした。

Ａ　生徒の考えが広がる場面

①「予想・予測する」②「想像する」③「ひらめく」など

Ｂ　生徒の考えがまとまる場面

④「筋道を立てる」⑥「関連づける」⑦「順位をつける」
⑪「比較する」⑬「選択する」など

Ｃ　生徒が考えをふりかえり、応用する場面

⑭「評価する」⑮「規則性を見つける」⑯「再構築する」など

４　研究仮説

教師が　**拡散する→収束する→統合する**　を意識して、
単元（授業）をつくると、生徒が思わず考えたくなる授業につながる。

ここでいう「拡散」とは、生徒の考えが広がる場面のＡである。拡散は、生徒が自由に予想したり、考えを広げたり、仮説を立てたりする思考場面のことである。おもに単元（授業）の導入に配置する。教師は、生徒が興味をもって予想したくなったり、意欲的に発想したくなったりする材や発問を用意する。

次の「収束」とは、生徒の考えがまとまる場面のＢである。収束は生徒が様々な考えや調べたことなどを比較したり、関連づけたり、論理的に考えたり、区分したりする中で、自分の考えをまとめていく思考場面のことである。生徒が自分の考えをまとめていくためには、教師は生徒が自分から考えをまとめてみたいと思ったり、考えをまとめる必要のある授業方法を取り入れたりすることが大切である。具体的には、疑問や課題を調べたり、話し合いや討論、レポート作成したりするなどの言語活動などである。

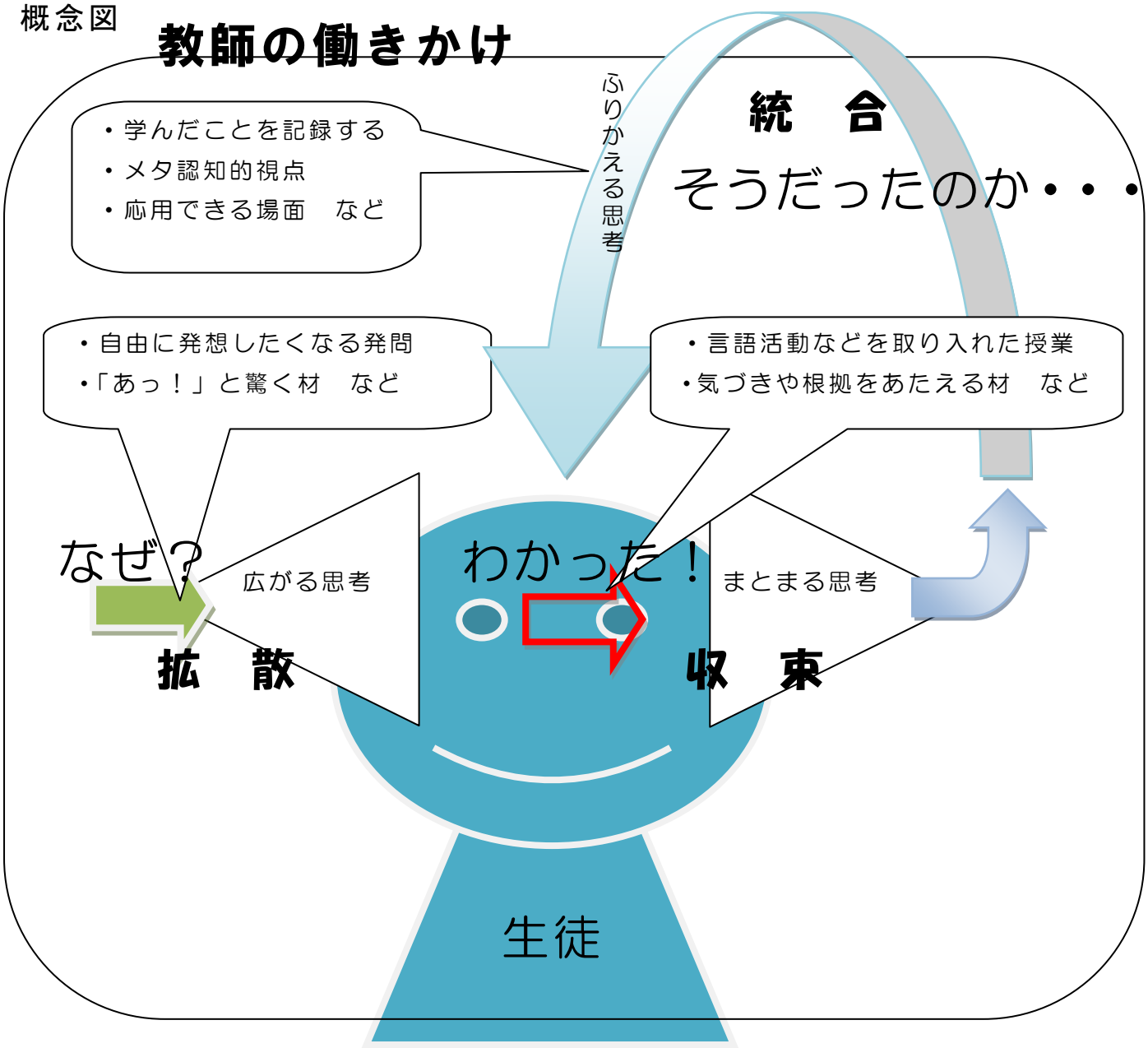
最後に「統合」とは、生徒が考えをふりかえり、応用する場面のＣである。生徒が単元（授業）の終わりに自己評価して、次に生かすことができるようにする思考場面のことである。生徒がこの単元(授業)で自分がどのような学習をして、何を考えてきたのか、学んだことを整理したり再構成したりすることが大切である。

例えば「中世の武士を現在の職業に例えると何になるのか」という問いについて、生徒は「警察官」「兵士」「公務員」「農家」などと考えを広げ、拡散していく。すると、生徒の中から「なぜ武士にはさまざまな職業や役割があるのか？」や「武士の生活の様子をくわしく知りたい」などという疑問や課題が生まれる。

そこで教師は生徒が調べたり、様々な資料から自分の考えをまとめたりする学習場面を設定する。すると生徒は中世の武士の生活や仕事の様子から、貴族に仕える武芸者など職能を起源とするものや、在地領主や農業経営者が武装化したものなど多面的・多角的にとらえることができる。そして「わかった！」という実感につながる。このように、学びに必然性が生まれて思考が収束していく。

最後に、単元の学習が収束したところで、生徒に学習全体をふりかえらせる。自分の学びを統合させることで、次の学習をつなげることができる。武士の多面性についてとらえていると、近世の兵農分離を織田・豊臣の統一事業としてだけとらえるのではなく、次第に農地から離れて官僚となっていく武士の側からも見ることができ、「そうだったのか・・・」と中世から近世への社会の変化をより深くとらえることができるだろう。

概念図



「拡散→収束→統合」は単元の基本的な定型の一つである。次の資料１のように、**拡散→収束→拡散→収束**と一度収束したものが新たな疑問を生み、考えが広がったり、資料２のように**拡散→収束（拡散→収束）**と大きな課題が収束する過程で小さな拡散や収束があったりするなどさまざまな展開が考えられる。また、「拡散→収束→統合」の定型とは異なり、考えが深まるほど拡散していくことやさまざまな問いについての答えが結びつき、考えが収束していくこともあるだろう。

大切なことは、生徒の思考を促し、内容の深い授業をする工夫であり、本研究ではその一つとして「拡散→収束→統合」のモデルを提案している。

資料１　単元で【拡散→収束→拡散→収束→統合】が見られる例（地理的分野）

単元名　「九州地方ではなぜ畜産がさかんなのか」
～九州地方では自然環境とどのように向き合っているだろうか～

単元のねらい

九州の農業に関する地図を作成する学習を通して、なぜ九州地方で畜産がさかんなのかを推測し、火山や気候といった自然とのかかわりから、九州地方の人々の生活の様子を考える。

単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	・九州地方の都市や山地、平地、河川を白地図にまとめる。	・おもな地名を確認する。
2	・九州地方が畜産がさかんであることを捉え、「九州地方のどこで畜産がさかんなのか」予想する。 ・具体的にどこで畜産がさかんなのか、分布図を作成する。	・都城市と横浜市の畜産物の生産額と比較したり、全国の畜産物の生産額に占める九州地方の割合を確認する。そこで、九州地方のどこでさかんか予想させる。【拡散】 ・畜産物の生産額が５０億円を超える市町村に色を塗るようにアドバイスする。南九州で畜産がさかんなことを捉える。【収束】
3	・つくった分布図から「九州地方南部でなぜ畜産がさかんなのか」を推測する。 ・自然条件から考えをまとめる。 「なぜ火山麓では畜産がさかんなのか」を根拠をもって考える。 ・火山の様子や人々の生活の様子をビデオで視聴させることで自然環境に向き合って生活している様子を知る。	・グループの話し合いをして意見を発表させる。【拡散】 ・畜産のさかんな場所の自然条件に注目するようにアドバイスする。【収束】→火山の分布図などの地形に着目するようにアドバイスする。 ・シラス台地の開拓の歴史などにも触れる。【収束】
4 5	・九州地方の農業（促成栽培や稲作、近郊農業）また、九州地方の工業、人口、結びつきについてまとめる。 ・学習のふりかえりをアルバムシートにまとめる。	・促成栽培から気候、稲作から河川、近郊農業から人口などの学習につなげる。農産物の出荷先などから結びつきにも触れる。また、工業やその発展の歴史に触れる。 ・農業は気候・地形などの自然条件と関係が深いということに気づかせる。【統合】

＊四国地方の促成栽培・中央高地の抑制栽培・関東地方の近郊農業・北陸、東北の稲作・北海道の酪農など、九州地方で学んだことを生かして、それぞれの地域の農業についての特徴をつかむ。

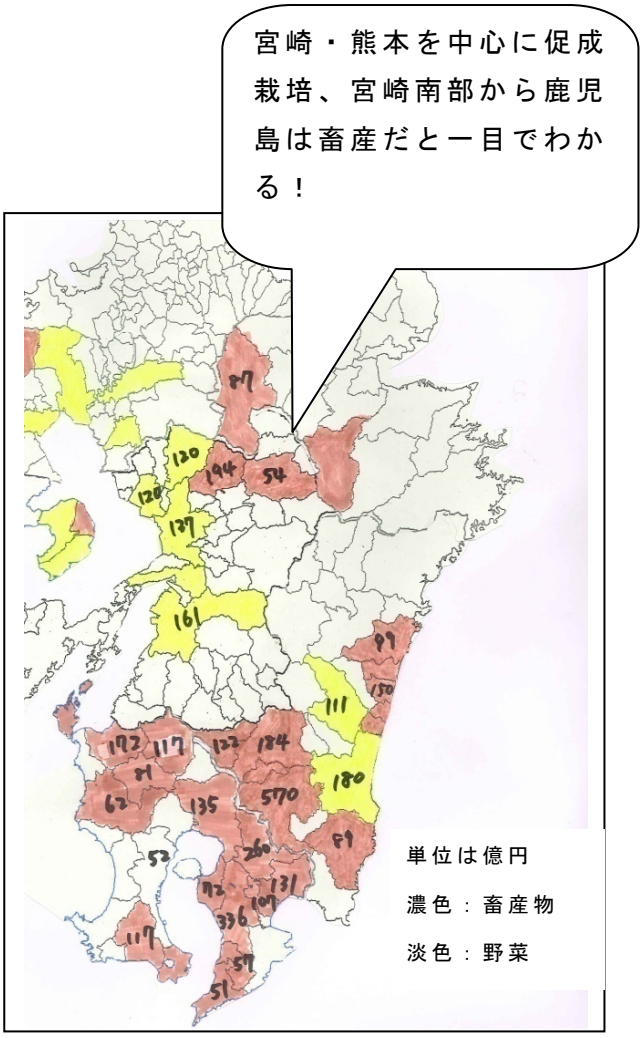
教師の役割

まず、都城市と横浜市の畜産物の生産額と比較したり、全国の畜産物の生産額に占める九州地方の割合を確認したりすることで、九州地方では畜産がさかんであることを捉える。そこで、九州地方のどこで畜産がさかんか自由に予想する。

次に畜産の生産額の階級区分図（右図）を作成させる。すると、南九州に高い数値の市町村が分布することがよくわかる。分布図を作成させる目的は二つある。

一つめは、畜産の生産額が鹿児島県や宮崎県に偏る地図を示すことで、生徒のなぜを引き出しやすく、思考の拡散をねらっている。

二つめは、はじめに生徒が自由に発想した答えについて具体的なデータを提示することで生徒の思考に根拠を与え、収束するためのヒントを与えることである。



生徒は、「気候と関係が深いのでは？」「土壌と関係があるのでは？」「どこに出荷するか？」「エサは何を与えているか？」「どのように畜産を行っているのか？」など南九州の特徴と関連することを考え始める。

そこで「九州地方の土地利用」や「火山の分布」など自然条件について調べることで、台風の多い気候やシラス台地などの土壌に適した畜産とそのエサとなるサツマイモの栽培等、透水性が高く、農地には適さない火山麓の土壌を畜産によって変えていった人々の努力に気がつき、思考が収束する。

ここの学習のまとめとして、農業は自然環境（気候や土壌）から影響を強く受ける産業であるということを気づかせたい。九州地方の他地域の農業（筑紫平野の稲作、熊本や宮崎の促成栽培など）やこれ以降の単元で農業を取り扱う際（関東地方の近郊農業や中部地方の抑制栽培、北海道地方の根釧台地の酪農など）に、ここで学習したことと比較させると良い。九州地方で学んだことを一般化することで、他地方に転移させ、生徒の思考を統合していくことができる。

資料２　単元で【拡散→収束（拡散→収束）→統合】が見られる例（公民的分野）

単元名「サラリーマンになって商品開発をしよう」

単元のねらい

経済の動きに着目し、マーケティングや商品開発のシミュレーションを行う。その中で、どのようなお菓子を開発するか考え、発表する。また経済の基礎的基本的な知識を習得し、活用を図る。

単元の流れ

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）
1	どのようなお菓子を開発するか、たくさんアイディアを出す。（グループ）	ブレインストーミングの技法を取り入れる。【拡散】
課題	売れているお菓子を調査する。（個人）	コンビニに行くなどして、世の中の動きをマーケティングさせる。
2 3	企業について知識を得る。（講義　一斉）	講義によって、企業についての基礎知識を確認する。
4 5 6	どのようなお菓子にするかを決定する。（グループ） ①マーケティングしたデータから様々なアイディアを出す。 ②商品のアイディアを絞り込む。	アイディアを決定するようにグループで話し合いをさせる【収束】 ①マーケティングしたデータを参考にするようアドバイスする（拡散） ②ターゲットやコンセプトを意識するようにアドバイスする（収束）
7 8	発表の準備をする。（グループ）	わかりやすく、インパクトのある発表になるようにアドバイスする。
9	商品をプレゼンテーションする。（グループ）	ポスターセッション形式にする。
10	まとめ（個人）	今回学んだことを消費活動でどう生かせるかという視点をあたえる。【統合】

教師の役割

この単元では、まずどのようなお菓子をつくりたいのかのアイディアをできるだけ多く出すため、ブレインストーミングを行う。どのような発想も大切にするため生徒は考えを広げることができる。次に各自の課題として、コンビニやスーパーを調査したり、ＣＭに注目したりして、実際にどのようなお菓子が売れているかマーケティングさせることで、さらにアイディアが深まり、実際に売れるような商品を考えられるようになる。さらにグループで検討する中でターゲットやコンセプトが絞られ、考えが収束していく。発表の後、単元のまとめとして、お菓子やものを消費するときに、どのような点に注意すればよいかなど、今回学んだことを実際の消費でどのように生かせるかについて書かせることで、生徒の思考を統合させる。

５　研究授業による検証

（１）授業づくりに着目した授業

地理的分野「関東地方はなぜ人口が多いのか」

関東地方の人口が多い理由を考える授業を行った。ここでは、生徒の思考場面を「拡散」→「収束」→「統合」ように配置すると生徒の思考が促されるのではないかと考えた。

具体的に言うと、拡散「なぜ関東地方の人口が多いのか予想しよう」→収束「交通や地形など、資料を根拠にして考えをまとめよう」→統合「人口と交通・地形が関係していることを東北地方でも確認しよう」という順で展開したところ、生徒の思考が促された。交通や地形などの資料を通して、初めに予想したことが覆ったり、さらに深まったりしていた。また、東北地方の人口分布についても東北新幹線の路線と結び付けて考えていた。

このように生徒の思考が「拡散→収束→統合」するように意識して、授業（単元）づくりをすることで生徒の思考が促され、より深い内容になった。「拡散→収束→統合」を意識した授業が学びの質を高めることにつながると確認できた。

（２）拡散に着目した授業

地理的分野「中国・四国地方の人口分布」　＊資料３（ｐ２１）参照

中国・四国地方の人口と横浜市の人口を予想し、比較しながら過密と過疎をとらえ、その理由を探る授業を行った。ここでは、生徒の思考を拡散するための教師の役割に着目した。生徒の考えを広げるように材や発問を工夫することで生徒の思考が促されるのではないかと考えた。

具体的に言うと、中国･四国地方の各県の人口と横浜市の人口を比較できるような材や「住んでいる人はどの地域を意識して暮らしているのか」「横浜市より県の方が少ないなんてありえるのか」といった発問を用意した。このような材や発問が生徒の関心を高め、課題解決の意欲を生むきっかけとなった。生徒は「瀬戸内の人口が多い」「横浜市よりも人口が多い県がないのはなぜか」など様々な気づきや疑問を発言した。さらに、その発言に対して「というと？」や「具体的に言うと？」というように、教師が多くのものを引き出す発問を返していた。

このように、生徒に驚きを与える材や自由な発想を生む発問を工夫すると、拡散を促し、学びの質が高まることにつながると確認できた。また、生徒の発言をしっかりと受け止め、発言にこめられた意味や思いをうまく引き出すように支援することなどが大切だと考えられる。

資料３　地理的分野学習指導案

１　実施日時　平成２３年１１月９日（市中学校社会科研究会研究授業）
２　単元名　　第３章　日本の諸地域
　　２節　中国･四国地方　―都市と農村の変化と人々のくらし―
３　単元目標

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
中国･四国地方について関心を高め、人口を主題にとらえる活動に、意欲的に取り組もうとしている。	中国･四国地方の中での人口のかたより、日本の中での人口の偏りから、地域の特色をとらえ、多面的･多角的に考察している。	中国･四国地方の地域の特色に関する諸資料から有用な情報を適切に選択して、効果的に活用している。	中国･四国地方の地域の特色について人口を主題に理解しその知識を身につけている。

４　授業計画（４時間扱いの１時限目）

生徒の学習活動	教師の支援・留意点等
◇中国・四国地方の各県の人口を予想する。 ・黒板に地図を書き、どんな県があるか確認する。 ・それらの県の有名なものをあげていく→参考Ａ ・日本の人口と４７の都道府県があることを示す。 ・生徒が出て黒板に予想を書き、その理由をいう。 ◇戸塚区の人口を示す。 ・２７万人 ◇横浜市の人口を示す。 ・３７０万人 ・横浜市より多い　少ないか ◇もう一度、各県の人口を予想し直す。 ・いろいろな意見をもとに書き換えていく。 ◇正解を発表する。 ◇神奈川県の人口をいう。 ・８８０万人　鳥取　島根　徳島　高知の１０倍 ◇他の県の人口をいう。→参考Ｂ ◇なぜ神奈川県や東京都などに人が集まるのだろう。 ・理由をあげさせていく。 ◇逆にいうと、それがないから人が集まらないっていうことなのかと質問する。 ◇次回からは、それを確かめていくと予告する。	＜参考Ａ＞　2009年県勢 鳥取　６０万人　砂丘　ハマナス　なし 島根　７３万人　妖怪　出雲　銀山 岡山　１９４万人　倉敷　カブトガニ 広島　２８６万人　原爆　厳島 山口　１４７万人　秋吉台　長州 徳島　８０万人　鳴門　阿波踊 香川　１０２万人　うどん　瀬戸大橋 愛媛　１４６万人　道後　銅山 高知　７８万人　龍馬　ゆず　キャベツ ＜参考Ｂ＞　2009年県勢 東京　１２５５万人 愛知　７２２万人 大阪　８６８万人 福岡　５０３万人

（３）収束に着目した授業

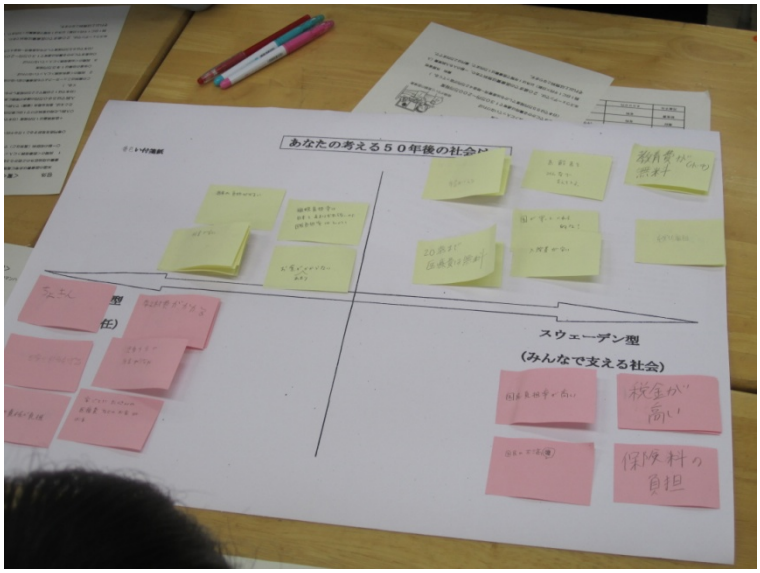
公民的分野「５０年後の日本の社会保障制度はアメリカ型かスウェーデン型かどちらがよいのか」　＊実践例（ｐ５３　参照）

５０年後の日本の社会保障制度は、アメリカ型かスウェーデン型かを討論する授業を行った。ここでは、生徒の思考を収束させるための教師の役割に着目した。話し合い活動を取り入れたり、生徒の考えが収束するような具体的なデータを与えたりすることで生徒の思考が促されるのではないかと考えた。

具体的に言うと、「５０年後の日本の社会保障制度はアメリカ型とスウェーデン型のどちらがよいか」という問いについて、グループでの話し合いや、意見を主張する活動を入れることで、自分の考えをまとめる必然性が出てきた。話し合う際に、議論が深まらなかったり、堂々巡りしたりする場合が予想されたので、教師が生徒の意見を図式化するなど、話し合いを整理する工夫も取り入れた。

また、アメリカの個人負担の医療費やスウェーデンの税率など社会保障に関する様々な数値データを与えることで、生徒の考えがより具体的になって、収束に向かう有効な手立てとなった。

このように、生徒が自分から考えをまとめてみたいと思う授業方法を取り入れたり、自分の意見を根拠づける具体的な材を与えたりすることが有効であると確認できた。また、生徒の話し合いの内容によっては教師がＫＪ法などの手法やさまざまな図解ツールを活用して話し合いを整理するよう支援することなどが大切だと考えられる。



（４）統合

思考について、「考えが広がる場面」と「考えがまとまる場面」があるということは先行研究などでも言われていることである。

研究を進める上で、本研究会ではこれに「考えをふりかえる場面」があると考えている。生徒が学習をふりかえることには、いくつかの効果が期待できるからである。それは以下の３つである。

①生徒が感じたこと、特に感情が付加されると知識が深く習得できること。

②学んできたことを整理して、知識を構造化できること。

③学んできたことを一般化して次に生かす汎用性があることなどである。

そこで、平成１７年度の関東ブロック横浜大会で提案したアルバムシート（＊資料４　ｐ２４　参照）を引き続き検証してみた。

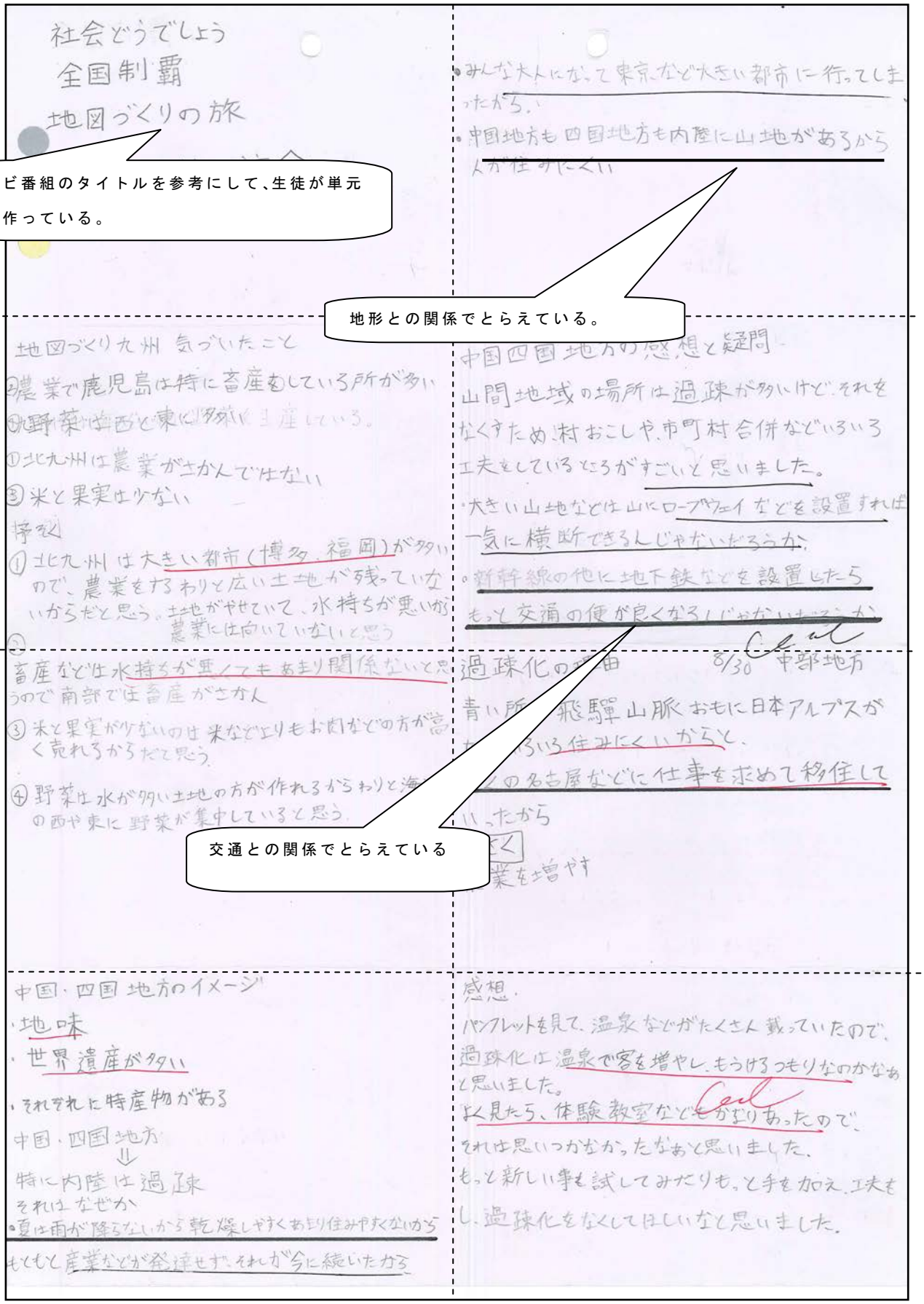
アルバムシートとは、何も印刷していない普通の画用紙を八等分に折って、その折り目を区切りとして、原則的には１時間に１マス、授業中に思考したこと、感じたこと、おもい、ひらめきなどを書き残していくものである。例えて言うと自分の感情をスナップ写真のようにアルバムに残すようなものである。

柔軟な使い方を想定して、罫線を引かない画用紙を使用している。使用方法の自由度が高いだけでなく、生徒が授業（単元）をふりかえって、自分の思考の流れを第三者的に（メタ認知的な視点で）俯瞰することができるものである。ｐ２０以降の（１）～（３）の三つの授業などでも使用された。

また、資料４はその例である。ここにあるように、この生徒は、九州地方の学習では農業と土地の関係を学び、それを中国・四国地方で応用している。さらに中国・四国地方で交通について学び、それを中部地方で応用している。この生徒は、日本の諸地域の最後に「農業や工業、また人口などは地形や気候などの自然的なことや、交通や輸送、また歴史など社会的なことなど様々なものに影響を受けている」と書き、学んできたことを一般化している。

このように、生徒が考えたことをふりかえって、アルバムシートに記録することが別の学習でも生きる転移力や応用力につながると確認できた。また、学習をふりかえる際に、学んだことを前に学習したことと結びつけたり、リンクマップなどで構造化させたりすることなどが大切であると考えられる。

資料４　アルバムシート


社会どうでしょう
全国制覇
地図づくりの旅
テレビ番組のタイトルを参考にして、生徒が単元名を作っている。
・みんな大人になって東京など大きい都市に行ってしまったから。
・中国地方も四国地方も内陸に山地があるから人が住みにくい
地形との関係でとらえている。
地図づくり九州 気づいたこと
②農業で鹿児島は特に畜産をしている所が多い
④野菜は西と東に多く生産している。
①北九州は農業がさかんではない
③米と果実は少ない
予想
①北九州は大きい都市（博多、福岡）が多いので、農業をするわりと広い土地が残っていないからだと思う。土地がやせていて、水持ちが悪いから農業には向いていないと思う
②畜産などは水持ちが悪くてもあまり関係ないと思うので南部では畜産がさかん
③米と果実が少ないのは米などよりもお肉などの方が高く売れるからだと思う
④野菜は水が多い土地の方が作れるからわりと海の西や東に野菜が集中していると思う
交通との関係でとらえている
中国四国地方の感想と疑問
山間地域の場所は過疎が多いけど、それをなくすため村おこしや、市町村合併などいろいろ工夫をしているところがすごいと思いました。
・大きい山地などは山にロープウェイなどを設置すれば一気に横断できるんじゃないだろうか。
・新幹線の他に地下鉄などを設置したらもっと交通の便が良くなるんじゃないだろうか
過疎化の理由　8/30　中部地方
青い所　飛騨山脈　おもに日本アルプスが
住みにくいから
の名古屋などに仕事を求めて移住して
いったから
業を増やす
中国・四国地方のイメージ
・地味
・世界遺産が多い
・それぞれに特産物がある
中国・四国地方
⇓
特に内陸は過疎
それはなぜか
・夏は雨が降らないから乾燥しやすくあまり住みやすくないから
もともと産業などが発達せず、それが今に続いたから
感想
パンフレットを見て、温泉などがたくさん載っていたので、過疎化は温泉で客を増やし、もうけるつもりなのかなあと思いました。
よく見たら、体験教室などもかなりあったので、それは思いつかなかったなあと思いました。
もっと新しい事も試してみたりもっと手を加え、工夫もし、過疎化をなくしてほしいなと思いました。

６　成果と課題

（１）成果

本研究は、８年前に横浜市で開催された第２３回関東ブロック中学校社会科研究大会の成果をもとに積み上げられたものである。前大会の研究も含めれば、１５年以上にわたって、授業実践を中心とした研究を進めてきた。

前回、意欲について研究したときの課題であった「内容の深まり」について、今回の研究で取り上げ、実践を積み重ねることができた。そして、生徒の思考場面である「拡散→収束→統合」を意識して授業づくりすることが学びの質を向上させることにつながると一応の道筋を示すことができたように思う。

一見すると物静かな授業でも生徒が真剣に考えている授業や、質的に高い学びにもっていくことができた授業も見られるようになった。また、実践研究の積み重ねから、内容的に深く優れた材の開発や効果的な方法の工夫ができたと考えている。これらは実践事例としてｐ３１以下に掲載しているので参考にしていただけたらと思う。

今では横浜市１８区ほぼすべての区において、共通の主題で研究授業が行われている。ここ数年は「生徒に思考させるための教師の役割」について様々な実践が行われ、「拡散→収束→統合」をキーワードに協議が行われている。例えば、実践事例ｐ４７にある「戦争は防ぐことができなかったのか」と同じように、太平洋戦争の原因について歴史をさかのぼって生徒に思考させる実践が様々な学校で行われている。

このように、この１５年にもわたる研究は本市の授業実践にとって大いに意義のある研究となったと考えている。

（２）課題

課題としては、今回の紀要に掲載された実践の共有化が十分に進んでいるとは言えないことがあげられる。特に、「統合」という言葉の使い方は本研究会が独自に考えたものであり、「ふりかえり」や「総合化」など四苦八苦した経緯がある。また統合に有効なアルバムシートについては、前大会同様に、使いこなすのが難しいとの指摘があった。この大会を機にこれらの優れた材や効果的な方法、またアルバムシートの活用について横浜市全体で共有化していきたい。

本市でも社会科教師の若返りが進み、日々の実践に悩みを感じている教師や今までの経緯を知らない教師、研究会の活動について十分に理解していない教師が増えてきており、そのことに配慮する必要にも迫られている。これからの研究では今までの成果を深めるとともに、広げられるかが問われてくる。

この関東ブロック大会はゴールととらえずに、前回の大会から成果を引き継ぎ、次回につなげていくもの、また横浜市全体に研究成果を広げていくための一つのきっかけと考えている。これまでご指導ご助言いただいた先生方に感謝を申し上げるとともに、本大会でいただいた様々なご意見、ご批判を今後の研究の糧としていきたい。

資料５　学習指導案の形式

１　実施時（平成２５年〇月）
２　クラス
３　授業者
４　単元名
５　単元のねらい
６　評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解

７　単元の構想メモ

学習内容について、授業者はあらかじめ、構造をしっかりと把握して授業をつくる必要がある。そのため、学習内容をリンクマップにしたり、学習内容をプロットにしたりするなど授業者は工夫して学習内容と思考場面の構造化を行う。学習内容の構造図は授業者が自分の授業のスタイルに応じて、自由に記入する。

８　視点

〈生徒を視点として〉

生徒の実態について記入する。例えば、

・生徒がこれまでどのような学習を行ってきたか。
・生徒の既習概念やこれまで思考してきたこと。
・生徒はどのようなことに関心をもってきたか。

などを記入する。

〈生徒に働きかける教師を視点として〉

〈生徒を視点として〉を生かして、生徒の思考が拡散→収束→統合するよう、どのように授業（単元）を工夫するかを記入する。

９　単元の流れ

学習活動と拡散、収束、統合の流れ、教師の役割を記入する。収束→拡散→統合は１時間の場合もあれば、単元として数時間に及ぶ大きなくくりになる場合もある。

	生徒の学習活動	教師の役割（拡散・収束・統合）

１０　本時の目標
１１　本時の授業計画
＊クラス、授業者名、本時の目標と授業計画は当日の学習指導案集（別冊）には示されているが、この紀要にある実践例では省略されている。

実践事例

地理的分野
歴史的分野
公民的分野

おもに研究を担当した委員

【地理的分野】

笹下中学校	法村　盛郎
南高等学校	鈴木　英夫
南高等学校付属中学校	小藤　俊樹
西金沢中学校	田中　良樹
老松中学校	柿崎　順子
荏田南中学校	近藤　悦子
中和田中学校	木村　友美
神奈川中学校	加藤　誠子
笹下中学校	川原　理恵
中田中学校	金子　久美代

【歴史的分野】

戸塚中学校	鈴木　浩
平戸中学校	古川　正人
荏田南中学校	堤　拓
大鳥中学校	松岡　茂房
蒔田中学校	井上　弘毅

【公民的分野】

栗田谷中学校	千田　晴久
富岡東中学校	山本　俊輔
荏田南中学校	大谷　英輔
日野南中学校	石川　博
港南中学校	小田島　奈美
南高等学校付属中学校	青木　裕介

実践事例について

研究委員が地理的分野・歴史的分野・公民的分野に分かれて、授業づくりを中心とした研究を数年にわたって進めてきた。その際に検討された実践事例である。これらの実践をもとにして、基調提案にある「拡散→収束→統合」について検証し、共通理解をはかった。また、拡散させやすい材の開発、収束させやすい方法の工夫、統合に向かうアルバムシートの使い方などを研究した。

〇地理的分野

３１ｐ　世界の生活と文化→絵日記という方法（研究授業）
３４ｐ　日本の諸地域→さまざまな地図を作図して材として利用する方法
３８ｐ　身近な地域の調査→身近な浮世絵や古地図などの材

絵日記という方法は、写真をよく観察したり、衣食住についての資料を読み取ったりと生活の様子を深く考察したりすることができる。この方法は生活の様子がわかる資料が豊富ならば質の高い学びとなる。歴史的分野でも取り入れることが可能である。この授業は２５年６月に行った研究授業の略案である。

日本の地理では、県勢などのさまざまな統計資料を利用できる。これらの資料を活用して、階級区分図、ドットマップ、カルトグラムなど作図をさせると、ただ地図を読み取る以上に深く考察することができる。また流線図はインターネットの乗り換えサイトなどを利用すれば比較的簡単に作成できる。

近世の浮世絵や古地図は比較的容易に手に入り材として活用しやすい。生徒も普段から見ているものならば、関心も高い。持続可能という視点を加えれば地理的分野だけではなく、公民的分野でも実践できる。

また、記念講演でも取り上げられた平成２５年度横浜市立中学校教育研究会社会部会夏季巡検「横浜臨海・南部巡検」において、この授業で取り上げた金沢八景を実際に訪れ、横浜市の歴史や授業実践についての研修を深めることができた。

歴史的分野

４２ｐ　古代→鑑真が来日した理由をアジア情勢からみた材
４４ｐ　近代→共通語という現在の生活に結びつきやすい材
４７ｐ　近現代→戦争についてカードを作ってグループで話し合う方法

小学校で学習していることと異なる視点で授業をすると、生徒に驚きを与え、考えを深めさせることができる。中学校教師が小学校で学習していることをしっかりと押さえておくことが大切である。

共通語という生徒にとって現実性のある材を使うことで、歴史で学んだことを現在の社会にふりかえって、統合することができる。

戦争の原因について考える授業は、生徒にとって切実感のあるものとなる。またカードの並び替えという手法を用いることで、ランキングと同じ効果があると考えられる。この授業は横浜市のさまざまな学校で実践されている。

公民的分野

５０ｐ　現代社会→身近な地域の祭や盆踊りという材
５３ｐ　経済（財政）→５０年後を考える材で話し合う方法（研究授業）
５６ｐ　政治（地方自治）→地域の方へのインタビューなどの材

生徒は身近な地域の祭や盆踊りに参加しているので、取り組みやすい材である。インタビューによって、生徒は問題を深く認識して学習の質をより高いものにすることができる。

現在の財政の課題は、生徒からは非常に遠いことのように感じられるだろう。これを「５０年後の将来」という視点を与えるだけで、生徒は自分のこととして切実感をもって考えることが期待できる。また、この授業は平成２４年１１月に行った研究授業の略案である。（この授業については基調提案でもくわしく触れてある。）

地方自治の現場で働いている民生委員や青少年指導員にインタビューすることで、地方自治のしくみや課題について切実感をもって考えさせ、深めることができる。インタビューした内容は地域と深くつながりのある材となる。